

境界要素法の高速アルゴリズム

JR西日本 正会員 ○田中俊作, 中央復建コンサルタンツ 正会員 山口耕治
 京都大学 正会員 西村直志 京都大学 正会員 小林昭一

1. はじめに

この報告は、境界要素法の高速化の一貫として、動弾性問題を対象として、ベクトルプロセッサ VP-400 に適したアルゴリズムを開発した結果を述べたものである。

ベクトル化計算の鍵は最も内側のDOループを如何に大きく取るかである。ここで開発したアルゴリズムの要点は、数値積分に際して、要素毎にGauss積分を行うという従来の方法の発想を転換して、Gauss点を固定して総ての要素に関する積分を行うようにした点である^{1,2)}。

2. 積分方程式とその離散化

時間調和な動弾性問題を考えると、滑らかな境界Sの外部問題の積分方程式は次のように与えられる。

$$0.5Iu(x) = \int_S \{ \Gamma_1(x, y)u(y) - \Gamma(x, y)t(y) \} dS_y + u^i(x) \quad (1)$$

ここに、 $u(x)$, $t(x)=Tu(x)$ はそれぞれ変位、表面力ベクトル、 T は表面力作用素、 Γ , $\Gamma_1=\Gamma T$ はそれぞれ基本解テンソル、 I は恒等テンソルである。なお、 $u^i(x)$ は入射波の変位場である。

この式を、局所基底関数 $N^\alpha(\xi)$ (ξ は正規座標、 ξ_s は要素の外向き法線方向に取る)を用いたアイソパラメトリック要素

$$x(\xi) = \sum_{\alpha=1}^S N^\alpha(\xi)x^\alpha, \quad u(\xi) = \sum_{\alpha=1}^S N^\alpha(\xi)u^\alpha, \quad t(\xi) = \sum_{\alpha=1}^S N^\alpha(\xi)t^\alpha \quad (2)$$

(x^α , u^α , t^α は節点番号 α の点の座標、変位及び表面力、 S は要素の境界上の節点数)を用いて離散化すると、次のような代数方程式を得る。

$$0.5Iu(x) = \sum_{j=1}^N \sum_{\alpha=1}^S u^{\alpha(j)} \int_{S(j)} \Gamma_1(x, y(\xi)^{(j)}) N^\alpha(\xi) J(\xi)^{(j)} dS(\xi) \\ - \sum_{j=1}^N \sum_{\alpha=1}^S t^{\alpha(j)} \int_{S(j)} \Gamma(x, y(\xi)^{(j)}) N^\alpha(\xi) J(\xi)^{(j)} dS(\xi) \quad (3)$$

ここに、 $\int_{S(j)}(\cdot) dS(\xi)$ は要素J上の積分を、 $\alpha(j)$ は要素Jの節点 α を、 $J(\xi)^{(j)}$ は要素Jに関するJacobianを、 $y(\xi)^{(j)}$ は要素J上の選点を意味する。

なお、上式に現れる積分を、特異積分を除いた残りをGauss積分で評価すると、例えば、

$$\int_{S(j)} \Gamma_{ik}(x, y(\xi)^{(j)}) N^\alpha(\xi) J(\xi)^{(j)} dS(\xi) \doteq \sum_{m=1}^M \sum_{n=1}^N \Gamma_{ik}(x, y(\xi)^{(j)}) N^\alpha(\xi) w_m w_n J(\xi) \quad (4)$$

のようになる。ここに、 w_m , w_n は ξ_1 , ξ_2 軸上のGauss積分の重みである。なお、特異積分は別に評価する。これらを式(3)に代入し、与えられた境界条件のもとで解けばよい。

3. 計算のアルゴリズム

式(3)に式(4)を代入した形では、例えば、

$$\sum_{j=1}^N \sum_{\alpha=1}^S t_i^{\alpha(j)} \sum_{m=1}^M \sum_{n=1}^N \Gamma_{ik}(x, y(\xi)^{(j)}) N^\alpha(\xi) w_m w_n J(\xi) \quad (5)$$

のようなものが現れる。後の都合上で、この積分のGauss積分の部分を次のように書いておく。

$$K(n(x)_k, n(K(j))_i) = \sum_{m=1}^M \sum_{n=1}^N \Gamma_{ik}(x, y(\xi)^{(j)}) N^\alpha(\xi) w_m w_n J(\xi) \quad (6)$$

Shunsaku TANAKA, Koji YAMAGUCHI, Naoshi NISHIMURA, Shoichi KOBAYASHI

ここに、 $n(x)$ は評価点 x の節点番号を、 $n(\alpha(J))$ は要素 J の要素内番号 α の節点番号を示す。また、添え字 i, k は、それぞれ3次元方向成分である。なお、節点の総数を M とすると、 $K(n(x)_k, n(K(J))_i)$ は、 $3M \times 3M$ の正方行列の要素である。

(a) 通常のアルゴリズム

通常は、式(6)を、先ず評価節点 x を決め、ついで要素 J を決めて、Gauss積分を実施し、節点 $\alpha(J)$ に関する係数を求めている。これを式で略記すれば次のようである。

$$\sum_{n(x)=1}^M \sum_{J=1}^N \sum_{k=1}^3 \sum_{i=1}^3 \Gamma_{ik}(x, y(\xi)^{(J)}) N_k(\xi) w_m w_n J(\xi) \quad (7)$$

ここに、 $\sum_{n(x)=1}^M \sum_{k=1}^3$ は行列の行成分 $n(x)_k$ に値を代入していく作業を、また $\sum_{J=1}^N \sum_{i=1}^3$ は列成分 $n(\alpha(J))_i$ に値を入れていく作業を意味している。これを”節点固定型アルゴリズム”と呼ぶことにする。

(b) ベクトル計算用のアルゴリズム

最も内側の $D0$ ループを最も長くするようなアルゴリズムを考える。先ず、Gauss点を決め、要素 J を決め、評価点 x を決める。数値積分は、方向 k, i 及び要素内節点 α に関して独立に行って、行列の該当した成分 $K(n(x)_k, n(\alpha(J))_i)$ に加えていって、行列 $3M \times 3M$ をつくる。これを略記すれば、

$$\sum_{m=1}^N \sum_{n=1}^M \sum_{J=1}^N \sum_{n(x)=1}^M \sum_{k=1}^3 \sum_{i=1}^3 \Gamma_{ik}(x, y(\xi)^{(J)}) N_k(\xi) w_m w_n J(\xi) \quad (8)$$

と順序を変えた上で、 $\sum_{k=1}^3 \sum_{i=1}^3$ を展開すればよい。この場合には、最も内側の $D0$ ループの範囲は、節点

数なる。これを”ガウス点固定型アルゴリズム”と呼ぶことにする。

なお、2次元問題も同様である。但し、動弾性の問題では、基本解に特殊関数が現れるので、現時点では、それをベクトル計算に乗るように直しておくことが必要である。

4. 計算効率

例として、2次元動弾性問題を解いた場合について、節点数と計算時間の関係を図-1に示した。この結果より、”ガウス点固定型アルゴリズム”の有効性が分かる。なお、解析的に積分を行うことができれば、上述のアルゴリズムのGauss積分の部分が省略できて、効率的なベクトル計算ができることは言うまでもないであろう。

参考文献

- 1) 山口耕治：V. P. によるB I E Mプログラムの高速化，京都大学修士論文，1988。
- 2) 神谷，西村，小林：ベクトル化計算によるB E Mの効率化とその弾性問題への適用，境界要素法論文集第5巻，pp.81-84，1988。

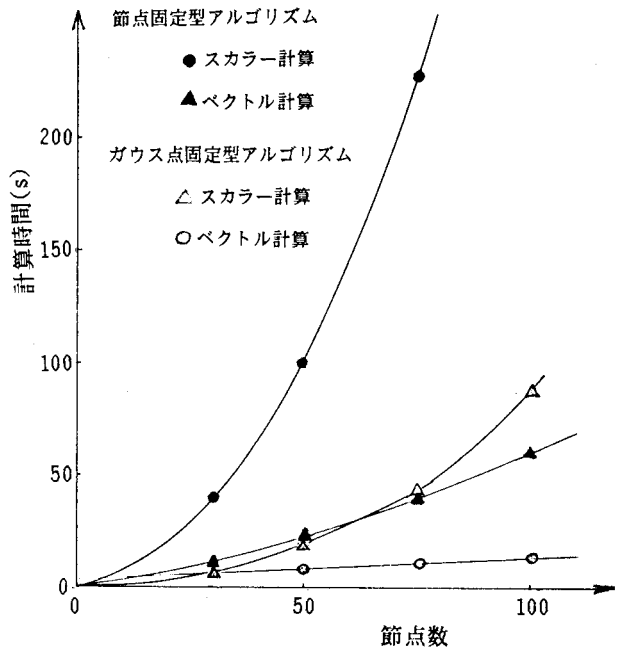


図-1 節点数と計算時間 (2次元動弾性問題)